

尾形光琳

江戸中期に活躍した絵師。京都の裕福な呉服商「雁金屋」の家に生まれ、また本阿弥光悦の姻戚関係にも当たり、幼い頃より、光悦や俵屋宗達の作品を見て育つ。父の死後、30歳の頃、莫大な遺産を受け継ぐも派手な生活により、数年で破綻してしまう。この頃、本格的に画業で身を立てる決心をしたとされる。狩野派などに学んだ後、宗達の絵画に傾倒し、デザイン的で装飾的な後に「琳派」と呼ばれる表現様式を完成させた。光琳は、屏風絵だけでなく、工芸や小袖(着物)の絵付け、小袖文様のデザインにも才能を発揮し、陶芸家の弟・尾形乾山の器にも絵を描いている。代表作のほとんどは光琳が40歳以降に描いたとされ、「燕子花図屏風」や最晩年に描いた「紅白梅図屏風」、工芸作品では「八橋蒔絵螺鈿硯箱」などがある。